

高齢者の「その人らしい暮らし」の支援の考察

—寺の前の家で暮らすAさんの事例から—

川崎医療福祉大学医療福祉学専攻 牧田 幸文 (008584)

[キーワード] 「その人らしい暮らし」、小規模多機能型居宅介護サービス、社会関係の維持

1. 研究目的

本研究の目的は、第1に高齢者の「その人らしい暮らし」の支援とはどのようなものか。第2にその「その人らしい暮らし」を実現するためにはどのような支援が行われているのかを具体的に明らかにすることである。本発表では、これらのことを地域の特性や個別の高齢者の生活に即して考察していく。

2. 研究の視点および方法

厚生労働省は、住み慣れた地域で、高齢者が尊厳を保ちながら自分らしい生活をするために、地域密着型サービスを提供している。地域密着型サービスは、高齢者が地域で「その人らしい暮らし」が出来るように支援することを目指しているとされる。例えば、その中の小規模多機能型居宅介護サービスでは、通所・訪問・泊りという多様な形態で高齢者の在宅生活の支援を行っている。厚生労働省は「その人らしい暮らし」とはいかなるものか定義していないが、小規模ケア施設への外部評価を義務付け、高齢者の「その人らしい暮らし」の支援がされているかどうか詳細に審査をしている。しかし、そのような標準化された支援とは別に、それぞれの高齢者のおかれた社会的・文化的文脈に即した「その人らしい暮らし」の支援が行われているのではないだろうか。地域における高齢者支援の先行研究では、従来ケア制度の量的整備や標準化が主に扱われてきたが、近年ではケアの質や個別化を問うものに焦点がシフトしつつある。特に小規模ケアに関する事例研究では、介護サービスの実態調査や公表されているサービス評価の結果に関する分析が多い。しかし、多様性に富んだ高齢者の視点から「その人らしい暮らし」の支援について明らかにした研究は少ない。高齢者の視点を重視した調査を採用し、「その人らしい暮らし」の支援の質と在り方を具体的に検討することが必要である。

本研究では、高齢者の「その人らしい暮らし」と支援を明らかにするため、質的アプローチをとる。本研究は、調査対象者の生活全体を把握し、対象者が意識化・言語化しない日常的な行動について考察するため、インタビューだけでなく参与観察を行う必要があり、エスノグラフィーを採用した。調査は、瀬戸内の漁村で小規模多機能型居宅介護サービスを提供しているX施設、施設周辺、調査対象者であるAさんの自宅と自宅周辺で行った。調査対象は、Aさんを中心に、Aさんの生活支援をしている職員、近隣住民とした。

3. 倫理的配慮

本研究を行うために、平成24年12月23日に調査対象施設の施設長と利用者家族会の方たちに調査目的と方法を説明し、同意を得た。その後、川崎医療福祉大学の倫理審査を平成25年1月15日に受審し、承認された(承認番号363)。

4. 研究結果

調査当時89歳の女性、Aさんは、瀬戸内の漁村に生まれ育ち、寺のお手伝いとして働いてきた。結婚歴はなく、一人で寺の前の長屋で暮らしてきた。近くに住んでいたAさんの妹は近年亡くなり、親戚はいない。Aさんは長年、住職家族と家族のような付き合いをしてきた。同じ寺のお手伝い仲間も近くに住んでおり、現在も頻繁に行き来がある。Aさんは2年前に入院してから足腰が立たない状態である。また、昨年心臓の手術をして長期入院した。退院後、Aさんは他施設を利用したが、寺の前から離れたくないと主張し、現在X施設の訪問と通いサービスを利用しながら自宅で生活している。

Aさんの「その人らしい暮らし」とは、寺の前の家で暮らすことである。自宅でのAさんは、トイレ、移動、食事以外はベッドで寝たきりの状態である。Aさんの家の台所の窓を開けると、ベッドに寝たままで寺の門と木々を見ることができる。Aさんは毎日、寺の緑や花を見て、寺の気配を感じながら生活をしている。家には、住職の長男の入学式時に住職家族と一緒にとった写真を額に入れて飾っている。住職の長男（調査当時小学生）は、毎朝Aさんに会いに来る。これはAさんにとって精神的な支えになっている。さらに、寺の元仕事仲間は時々家に惣菜を一品持って来て、世間話をして帰る。こうした昔からの知り合いとの交流は、この寺の前の家に住み続けることで成立している。また、Aさんにとって、近くの食材店の人との関係も重要である。Aさんはこの店に食材や惣菜を注文し、店員が3日に1度程度配達に来る。店員は注文されていない季節の果物もついでに持ってくることがあり、Aさんは嬉しそうに取り出し、季節のおいしい食べ物等について店員と会話する。

X施設の職員は、1日5回、トイレ・食事・リハビリ支援のためにAさんを訪問する。また、Aさんは週に2回X施設に通うが、昼食と入浴の支援を受けてからすぐに家に帰ることを希望される。職員はAさんの要望にあわせて柔軟に日程を変更する。職員は、Aさんがお寺の気配を感じながら生活することを好み、Aさんのお寺の前の家が交流の場であることを理解し、在宅中心の生活を支援している。

5. 考察

Aさんには親族がないため、責任をもってAさんを見守る「キーパーソン」はいないとX施設の職員は言う。しかし住職の長男や寺の元仕事仲間をはじめとする寺院関係者、近隣の食材店員は日常生活での交流を通じてAさんの精神的な支えや見守りを行っており、その意味でAさんにとっての「キーパーソン」であるといえよう。住み慣れた環境で、長年培ってきたこれらの人々との関わりを持ち続けることがAさんにとっての「その人らしい暮らし」であり、これらの人々のAさんへの日常的な配慮やX施設の柔軟な支援がそれを可能にしている。本事例から、従来関係を持ってきた人々との日常的な関わりが、その人らしい暮らしを継続させる上で重要であることが明らかになった。